

編集後記

今年も学生諸君が各グループで4つのテーマについて研究を行い、その結果を報告書としてまとめる運びとなった。まずは関係各位に深くお礼申し上げる。

今年度のテーマは、どういうわけか、先行研究と結果が一致しないものが多かった。先行研究とほぼ同じ条件を設定したにもかかわらず、何の効果もみられなかったもの、あるいは、先行研究とは逆の結果が得られたものもあった。このような状況に対する学生諸君の反応は科学教育の観点からみて興味深いものであった。まずは何がいけなかったのかを反省するという態度がみられた。刺激や条件の設定、手続きなど何かが間違っていたのではないかと、あるいは、実験参加者に課題の意図を伝えそこなっていたのではないかと問題点を挙げるものである。このことそのものは誤りではない。実験の実施やデータの分析に不備がなかったかは入念に検討すべきである。他には、控えめにではあるが、仮説は支持されなかった、すなわち、先行研究の結果や理論は誤りであったという態度がみられた。仮説が正しければ予想通りの結果が得られるはずなのだから、予想通りでないときにそのように考えることは自然である。

しかし、いずれの態度も、それのみで完結したのでは科学的に実りのあるものとはいえない。科学的な仮説や主張は、研究の蓄積に基づいてはじめて評価が可能になる。単発の実験や調査においてある主張が支持されたからといってそれが“正しい”とは限らない。のちの研究者が追試を行ったら再現できないことはままある。だが、再現できなかったからといって、それだけで先行研究の主張や結果が誤っていたとは限らない。関係がないだろうと思われていた些細な違いが結果を左右したかもしれないからである。そのような場合には、結果が異なることは見過ごされていた要因への気づきを促し、むしろ新たな発見のきっかけとなりうる。

したがって、先行研究と異なる結果が得られたときには、先行研究との違いを入念に検討したうえで、その結果を丁寧に報告することに少なからぬ価値があると私は思う。期待と異なる結果であったとき、レポートにときおり“よい結果が得られなかった”という表現を見かける。しかし、上のような事情を踏まえれば“よい結果”が何であるかは一概には決められないのである。予想外の結果こそが新たな発見を生み出す“よい結果”となるのかもしれない。

2018年3月3日

大正大学心理社会学部人間科学科

井関 龍太

r_iseki@mail.tais.ac.jp